読書通信

No. 130

1　パリで開かれているＣＯＰ21をめぐりメディアは盛り上がっている。安倍首相はCO_2削減へ世界のリーダーシップをとるといわんばかりの演説をしたようだが、「地球温暖化」には多くの落とし穴がある。少なくとも**深井有『地球はもう温暖化していない』**（平凡社新書、８８５円）あたりを読んでから政策決定（あるいは報道）をしたほうがよいのではないか。

なんと、データ上は過去20年にわたり温暖化は進んでいない、気候変動の主役はCO_2ではなく太陽であり今後は太陽の活動が弱まり寒冷化の可能性が高い、だからCO_2を減らすこと自体には意味はない、というのが本書の結論である。「地球温暖化」が政治化され各国の思惑がぶつかり合って舞台裏で利害を争うテーマとなってきたことも、明快かつ詳細に述べられる。ＩＰＣＣ（政府間パネル）が何をしてきたのか、その報告書がいかにずさんか、排出権取引など金儲けの話が多すぎる、など「温暖化信奉」の立場からはそんなばかな、と思いそうな事実が次々に明らかになる。何でも「温暖化だ」で思考停止してしまうのは危険である。

2　第２次大戦下、日本国ヴィザを発給してユダヤ難民６０００の命を救ったスギハラの名はつとに有名だが、**白石仁章『杉原千畝』**（新潮文庫、５９４円）はヴィザ発給の経緯だけでなく、外交官としての生涯を詳述して人間的側面にも見事に光を当てた力作で、映画を見て済ますずぜひ読んでほしい。特にインテリジェンス・オフィサーとしての卓越した能力が難民救済と不可分だったことが浮き彫りにされるのが本書の特徴である。ユダヤ難民はナチズムとスターリニズム両者の被害者であることと、バルト三国と周辺国の地政学がよく理解できる。

3　原田伊織『明治維新という過ち』を7月号で紹介したら予想外に好評だったので、「維新はまやかしである」という同じ視点からの**苫米地英人『明治維新という名の洗脳』**（ビジネス社、１５１２円）を紹介したい。薩長のテロリストたちに焦点を当てた原田本に比べ、維新を主導したのはグラバー商会やジャーディン・マセソンなどの外国資本で、裏には多くの日本側エージェントがいた、その権力構造は今なお続いている、とする。ただし彼らは日本を植民地化しようとはしなかった。なぜか。薩長史観を見直すことの重要性と面白さがここにもある。

4　**トム・ラス『座らない！』**（新潮社、１４０４円）の広告に「ＮＨＫ・クローズアップ現代で大注目！」とあった。食べる、動く、眠るの視点で30ずつトピックスがあるのだが、食が「徹底した自然菜食」なのはともかく、売りは「座らない」で、人間、座って仕事をし続けると健康は守れない、だから立って会議、仕事、休息をせよ、とにかく歩き回れというのは、電車で「座らない」をモットーにしている筆者にとっても刺激的だった。眠る重要性も強調される。**（純）**